

1 はじめに

様々な心身的な理由により学校に登校できず、年間30日以上の不登校の状態にある児童生徒が、平成22年度の全国調査において約12万人程度おり、佐賀県においては、816人（国公私立小・中学校）となっている。佐賀県では、ここ数年、数値は横這いもしくは、微減傾向であるが、各学校においては、その対応に苦慮している状況がある。

このような不登校の児童生徒の受け皿として、本教育センターには、「佐賀県学校適応指導教室 しいの木」（以下「しいの木」）があり、不登校の児童生徒への心理的な理解と対応の実践的研究を行っている。「しいの木」に通級する児童生徒は、それまでの学校生活の中で、対人関係の苦手さから周りの友達や先生と親密な関係性を築けなかったり、聞くことや読み書き等の苦手さから学習場面において十分な成果を得ることができなかつたりしており、学校生活を送る上での自己有用感や満足感を感じることができずにいることが多い。

このような状態の不登校児童生徒の家庭での生活を見てみると、その多くの時間を携帯型ゲーム機やインターネット等を使って過ごしており、児童生徒にとっては、それらは興味関心の高いものである。そのため、自室で過ごすことが多くなり、家族や学校関係者ともかかわることが減る一方で、近年の高速ブロードバンド化により、自宅にいながら友達や見知らぬ人とインターネットを介して、共通の趣味を楽しむ者もいる。中には、家にいても特にすることがないので、とりあえずやっているという者もいる。

そこで、今の社会において必要不可欠であり、多くの楽しみを有する携帯ゲーム機やパソコン、インターネット等を活用することで、それらに興味関心の高い児童生徒へのかかわりのきっかけとなりえると考えた。また、多くの機能を有し、利便性の高いタブレットPCを用いることで、児童生徒の多様な活動に対応することが可能になると思われた。さらには、児童生徒にかかわる関係者が、彼らの興味関心のある活動に寄り添うことを心がけることで、主体的な活動へと広がっていくであろうと考え、本研究に取り組むこととした。

2 研究の内容

- (1) ICTを活用した人とかかわるための自己表現の場の設定
- (2) ICTを用いた一人一人が取り組みやすく学びやすい学習環境づくり

3 研究の実際

- (1) ICTを活用した人とかかわるための自己表現の場の設定

今回の取組を進めるにあたって、図1のステップに基づいて支援を行った。まず、彼らと「つながること」。これは、在宅で不登校状態にある児童生徒とのかかわりを深めることであり、1対1での信頼関係を築くことに重点を置くことにした。次のステップは、不登校であった児童生徒が自分のできる方法で自分の思いを「つたえる」こと。これは、日

々の活動で感じたことを周りの人に伝える意欲を高め、相談担当者以外の人とつながることをねらった。さらなるステップとして、家族や学校関係者等と自分たちの発信したものと時間、経験を「わかちあう」こと。これは、自分たちの発信したものを介したやりとりを行ったり、直接的、または間接的なかかわりを通して、同じ時間、同じ体験を共有することに取り組むことにした。これらのかかわりを通して、人とかかわることの楽しさを実感し、少しでも学校復帰への意欲と自信を高めることができると考え、次のような取組を行った。



図1 ICTを活用した支援のステップ

ア 「つながる」ことに重点を置いた取組

タブレットPCに含まれるアプリの次の3つの利点を生かして取組を行った。

- ① 魅力的なアプリが豊富にあること
- ② 不登校児童生徒が苦手とする言葉を介することなく、かかわりがもてること
- ③ 一人でできるものもあれば、二人で、時には、大勢でできるアプリがあり、活動を共有できること

【事例：中学校1年・生徒A】

小学校の頃は、病気以外で欠席することはほとんどなかったが、中学校に入学してしばらくしたころから、登校を渋るようになった。夏休みを終えた2学期からはほとんど登校しなくなった。教育センターでの来所相談と並行して、家庭訪問での支援を行った。また、「しいの木」への見学を1回行っていった。

《カメラアプリを使ったかかわり》

来所相談で関係性を築き、家庭訪問による支援を始めた。初めての訪問では、いつもは寝ている時間であったが、起きて外まで迎えに来てくれた。しばらく室内でかかわった後に、生徒Aが「家の周りの写真を撮っていいですか」と担当者に伝えたので、このアプリを紹介した。操作を覚え、自分を起点に一回りし、パノラマ画像を撮影した。撮った画像を「しいの木」へ送ってみようと提案するとうなずき、担当者がメールに添付して送った。返信メールをすぐに受け、「いいところだね」という返信メールの文言に照れたような笑顔を見せていた。

《通信アプリを使ったかかわり》

図2のビデオ通話ができるアプリは、離れた場所でも映像と音声でかかわることができ

る。訪問支援では、本人の承諾を得て、「しいの木」と通信を行った。始めは、緊張した様子も見られたが、慣れてくると手を振ってみたり、「しいの木」のスタッフからの問い掛けにも笑顔で答えたりする姿が見られるようになった。また、スタッフだけではなく、「しいの木」の通級生ともあいさつをしたり、手を振ったりすることが増え、自然なかかわりができるようになっていった。



図2 通信アプリを使っている様子

《生徒Aの変容》

数回の訪問支援の中で、担当者との関係性も深まっていった。また、「しいの木」のスタッフや通級生と通信アプリを使うことで、間接的であったが面識をもち、簡単なあいさつや会話ができ、それが、「しいの木」で過ごしてみようという意欲を高めることにつながったようだ。数回の訪問支援後には、「しいの木」に通級するようになり、楽しく通級生やスタッフとかかわれるようになった。

このようにアプリを活用して不登校児童生徒との「つながる」ことに取り組んだが、これだけあれば不登校が解決するというものではない。あくまでも、彼らとの「つながる」ためのきっかけの道具にすぎない。ただ、この小さなきっかけで、彼らとつながることができれば、次は、少しずつ安心できる関係を築き上げることができる。この時にもタブレットPCも活用するが、その他のツールも使いながら、一緒にいることが楽しい、自分につきあってくれるという思いをたくさん感じられるような働き掛けが必要である。そして、彼らの自宅や面接室という面接担当者との二人だけの関係から、場所を変え、多くの人が利用する公共の場へとつないでいくことになる。その際、突然場所や関係性が変化するということは彼らにとっては、とてもエネルギーを必要とする。しかし、今回のような、映像や音声を通じて、新しい場所でもそこがどのような場所か分かる、知っている人がいるという経験があれば、さほど大きなエネルギーも必要としなくなるということが分かった。

イ 「つたえる」ことに重点を置いた取組

「しいの木」に通級する児童生徒が主体となり更新作業をする、ブログ「しいの木通信」を開設し、「しいの木」における日々の活動の表現の場とした。このブログは、10月に行った宿泊体験から取り組んでいるが、児童生徒がとても楽しみにしていた活動であり、多くの書き込みを行った。書き込みの方法は、タブレットPCで撮影した画像を中心に、思い思いのタイトルや文書を交えて行っていた。この取組においても、多くのことを語らず、写真1枚でその場の様子を伝えることができるというICTならではのよさを生かしたものであった。「どうだった？」の問い掛けには、とても緊張し、言葉でうまく伝えることが苦手な彼らであるが、お気に入りの場面を、自由な構図で相手に伝えることができたこ

とは、彼らにとっては自分の思いを伝えやすいものであったと考える。また、図3のように短いながらもその場の様子を言葉でも伝えようとする姿も見られた。投稿する写真に合うコメントをキーボードで入力したり、時には、顔文字を付けてみたりして、相手に気持ちや様子を伝えようとしている姿を感じることができた。



図3 ブログの記事



図4 ブログの記事とそのコメント

図4は、調理活動でホットケーキを作った時のブログである。ブログにアップされていた写真が、自分のトレードマークであったのに驚き、家からコメントを書き込んでいた。実は、このマークの持ち主は、インフルエンザでこの調理活動に参加できなかったのだが、周りの友達が彼のために作ってくれていた。それを知った彼は、「早く元気になって、しいの木に行きたい！」という気持ちを書き込んでいた。これは、「しいの木」という場所に所属感を感じ、友達のやさしさにふれることができたからだと考える。もし、このブログがなかったら、友達の温かさを知らずにいたかもしれない。このブログを活用することで、お互いの気持ちを理解し合い、人とかわるこの意味を感じることを促すことができたと考える。

ウ 「わかちあう」ことに重点を置いた取組（省略）

(2) ICTを用いた一人一人が取り組みやすく学びやすい学習環境づくり

昨今の特別支援教育の考え方においては、学習や生活場面におけるつまづきへの対応として、一人一人の努力により改善を図るのではなく、かかわる者が、児童生徒のできない状況を把握し、いろいろなツール（人やもの）を提供し、活用を促すことで課題が達成できるような状況をつくることが求められている。つまり、児童生徒の苦手さは、周りの支援者の働き掛け次第で、その改善、克服を図ることになり、このようなかかわりを充実させていくことで児童生徒の学習や生活への意欲を向上させることにつながると考えられている。

このかわりの一つとして、ICTを児童生徒の特性に応じて活用することで、児童生徒の苦手さを軽減でき、学習や活動への意欲を高め、生きて働く力を身に付けることができるようになると考え、次のような取組を行った。

ア 中学校1年生・生徒Bへの支援の取組

小学校の頃から不登校。中学校入学後もその状態が続いていた。「しいの木」へは、小学校の頃から通級をしており、安定した生活を送ることができていた。しかし、学習に対する意欲は高まらず、中でも「書くこと」については、自分自身も苦手さを感じていた。

(ア) 支援の方向性と経過

家庭では、携帯型ゲームやインターネットを使って過ごすことが多くあった。「しいの木」の通級生と仲よくなり、パソコンのチャット機能を使って、やりとりをするようになった。パソコンのキーボードを使うことで文字による表現については、あまり抵抗を感じていないようであった。そこで、「しいの木」のタブレットPCを使い、活動の中で活用することを促した。

(イ) ワープロアプリを活用した事例

このアプリは、タブレットPCのスクリーンキーボードを使って文字の記録を行うことができる。右の画像(図5)は、どんぐり村で就業体験を終えた生徒Bが、どんぐり村の職員さんに宛てたお礼の手紙の下書きである。生徒Bは、字を書くことをとても嫌がっていたため、お礼の手紙を書けるだろうかとスタッフの間では危惧していた。しかし、図5のようにとてもすばらしい手紙を書くことができた。このアプリを使ったことで、「字を書く」という負担感が軽減され、文字を入力しながら、文章の構成を考えることに重きを置き、手紙の内容をまとめることができたためと考える。最後は、このメモを見ながら、文章を書き、どんぐり村の職員に手渡すことができていた。

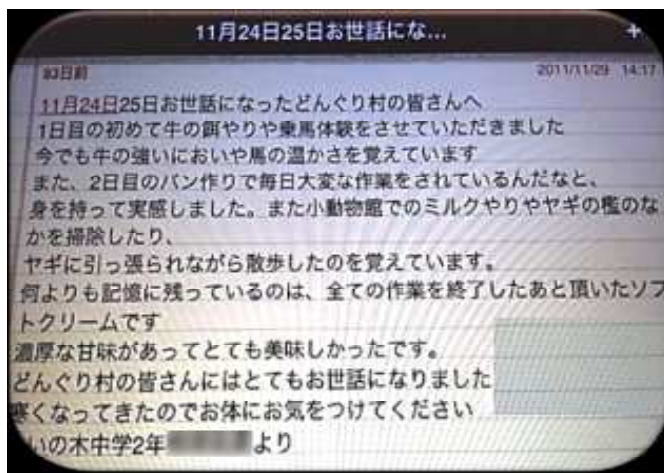


図5 タブレットPCに入力したお礼の手紙

イ 「しいの木」における学習支援の方向性

不登校であった児童生徒への学習支援を行うには、まずは心の安定が必要と考える。信頼できる関係者の中で、心のエネルギーを蓄え、その後、学習へと気持ちが向いていく。不登校児童生徒の学習意欲の高まりに応じた「しいの木」におけるICTを活用した学習支援プラン例を図6のように考えた。

始めの段階では、児童生徒の苦手な部分を使った学習よりも、得意な部分を生かした学びの場の提供が必要である。そして、次の段階では、今できる内容に取り組んだり、そこ

から少しだけ幅を広げたりできるような学習内容がよいと思われる。また、ゲーム性のあるものを取り入れることで、できるまで取り組んでみたり、時には、周りの人と協力しながら課題を達成したりしていくようなものもよいと考える。この段階まで至ると、学習内容に対するエネルギーも十分備わってきており、少しずつ学校での学習へと移行することになる。

ただ、学校の学習については、一人で取り組むことは難しい。そこで、学習ソフトが活用できると思われる。これには、音声、動画、画像とさまざまな方法で解説があり、一人一人の苦手さを補った学習が期待できる。また、それまでの未学習な部分や得意な教科などを自分のペースで取り組むことも可能である。不登校や相談室登校の児童生徒にとっては、このような学ぶ機会を得ることで、少しずつ学習の定着を図ることができるとされる。そして、ある程度の自信をつけ、学校のワークシートやドリルに取り組んでみたり、定期テストに挑戦してみたりすることで、中学校卒業後の進路についての意志が明確になり、学習への意欲もさらに高まっていくと考える。



図6 「しいの木」における学習支援プラン（例）

4 おわりに

今回の取組においては、不登校児童生徒の興味関心に寄り添い、「しいの木」が安心して心地よく過ごせるような場となるために、タブレットPCをいろいろな活動場面で活用した。彼らがICTを活用し自分でもできることが増えていったことで、周りの人と豊かにかかわるためのエネルギーを高めることにつながっていったと考える。そして、今回の取組を通して、少しではあるが彼らの学校復帰への意欲と自信の高まりにつながることができたと考えられる。

今回の取組に対しては、ネット社会への依存が高まり、ますます引きこもりを助長するのではという指摘もある。今回のICTを活用した不登校児童生徒への支援は、あくまでも彼らとにかかわりのきっかけを広げるものであり、目指すところは、彼らが「人の心の温かさを肌で感じるかわり」を実感し、よりよい社会参加を実現していくことである。

研究の詳細は、佐賀県教育センターHP 適応指導教室「しいの木」を御覧ください。

<http://www.saga-ed.jp/shidou/shiinoki/ict/index.html>